

ISSN 2186 – 3989

# 専門基礎ゼミナールにおける主体的な学びの変化

斎藤 英明、田部田 晋、篠原 史成

Changes in independent learning in 2nd grade seminars

Hideaki Saito, Shin Tabeta and Fuminari Shinohara

北 陸 大 学 紀 要  
第55号(2023年9月)抜刷

## 専門基礎ゼミナールにおける主体的な学びの変化

斎藤 英明<sup>\*\*</sup>、田部田 晋<sup>\*</sup>、篠原 史成<sup>\*</sup>

Changes in independent learning in 2nd grade seminars

Hideaki Saito<sup>\*\*</sup>, Shin Tabeta<sup>\*</sup> and Fuminari Shinohara<sup>\*</sup>

*Received August 4, 2023*

### 抄録

本稿は学生の主体的学びの変化を明示するために、学習態度が時間とともにどのように変化しているかの可視化を試みた。対象として北陸大学経済経営学部で開講されている専門基礎ゼミナールの学生に 4 月から 7 月にかけてアンケート調査を行い、回答をもとに学習態度に関する因子分析を行った。アンケート結果の結果、もともと学習に対して意欲的な学生もそうでない学生も、時間とともに学習意欲が低下し、その後、改善する傾向が見られた。他方で、改善にかかる時間は学生によって異なり、意欲的な学生ほど短期間で意欲の改善が見られるが、そうでない学生は改善に時間がかかるという結果が示された。こうした結果は、学生間で学習に対する主体性に差があると同時に、授業設計にも関連がある可能性を示唆する。また、学生が主体的な学習を行えるように、適切なタイミングでの教員からの働きかけの必要性を示唆するものであると考えられる。

**キーワード：**主体的学び、学習意欲、学習態度、専門基礎ゼミナール

---

<sup>\*</sup> 北陸大学経済経営学部 Faculty of Economics and Management, Hokuriku University  
<sup>\*\*</sup> 責任著者 斎藤英明 Hideaki Saito hi-saito@hokuriku-u.ac.jp

## はじめに

本稿は北陸大学経済経営学部2年生を対象に開講されている専門基礎ゼミナールの学生を対象に、学生の学習態度の変化を明示することを目的としている。文部科学省（2012）がアクティブ・ラーニング型の授業を推奨するようになったことや、山内（2021）や梶谷・土本・佐藤（2021）が指摘するように2018年からのコロナウィルスによって大学での授業形態や学生の質に関して変化が生じていることを研究の背景としている。

他方で、中井（2015）が指摘しているように、大学生には専門的知識のみならず、知識・理解、汎用的技能、態度・志向性、統合的な学習経験そして創造的な思考力など幅広い能力が求められている。筆者らが所属する北陸大学（2021）でも社会問題解決に向けて積極的に取り組む学生を育成し、「学生の成長力 No.1」を掲げ、専門分野の知識のみならず、主体性や協働性、そして多様性などを涵養できるようにカリキュラムを構築している。こうしたことに鑑みるに、大学での教育はこれまでのような教員から学生に対して一方的な知識の伝授・教授ではなく、学生が学生生活を通して何を学んだかを認識することが重要であり、学習主体である学生の学習態度や意欲はこれまで以上に重要になっていると考えられる。

本稿はこうした点を踏まえ、学生が主体的に学習を行えているか否かを把握するために、4月から7月にかけて学習態度に関するアンケート調査を行い学生の学習態度の変化把握を試みた。

## 方法

本稿は学生の主体的な学びを促す動機を明示するために、アンケート調査を通じて学生の学習意欲を調査した。対象とした科目は北陸大学経済経営学部マネジメント学科の2年生必修科目である「専門基礎ゼミナール」である。当該科目は1年生必修科目である「基礎ゼミナール」を土台とし、それよりも高度な課題解決力やディスカッションに関連した能力の獲得、そして主体的な学習力を身に付けることを目的としている。また、マネジメント関連分野である経営、経済、スポーツマネジメント、情報、法律の5分野を学ぶことで学生が専門知識と自分の興味・関心のある分野を見つけ、3年生より開始される専門ゼミナールをスムーズに選択できるように設計されている。したがって、学生にはさまざまな分野の学習を通して自分の興味・関心を見つけ、主体的な学習意欲・学習態度で授業に臨むことが期待されている。

こうした授業設計のもと、本稿は学生の学習意欲の調査を通し、主体的な学びとそれを行う内発的動機の明示を試みた。アンケート調査は溝上（2009）および畑野・及川・半澤（2011）を参考に、表1にある質問項目を4月から7月にかけて月に1度、主に月初めにMicrosoft formsを通じて回答を集計した。研究対象は著者らが担当するクラスの学生49名（うち、男子学生：42名、女子学生：7名、平均年齢：19.6歳、標準偏差：0.7）である。男女比にやや偏りがあるように感じられるが、本学経済経営学部の男女学生比も偏りが大きいため、本稿の対象に特段偏りがあるというわけではない。アンケートは43問の質問項目で行った。直接的に学習に関連することから、サークル活動やアルバイトなど授業以外での時間の使い方に関する項目、また、交友関係など3つのセクションに分かれて回答を求めている。主として学習態度について問うているセクション1（1～23）は5段階（4：あてはまる、から0：当てはまらない）から一つを選択する択一方式である。学習に対する積極的関与について問うているセクション2（24～26）は4段階（3：あてはまる、から0：あてはまらない）から一つを選択する択一方式である。そして、大学生活について

て問うているセクション 3 (27～43) は複数の選択肢の中から一つを選択する択一方式である。なお、倫理面での配慮として、回答は任意であること、収集したアンケート結果は学会発表や論文投稿を通じて情報公開されること、個人が特定されるような情報は公開されないことを伝えた。

本稿の目的である学生の学習意欲の変化を観察するという点から分析の対象は 4 月から 7 月まですべてに回答をした学生とし、24 名となった。学習意欲の変化を観察するという本稿の目的に鑑み、分析の対象は質問番号 1 (Q01) から質問番号 29 (Q29) までとした。回答結果から探索的因子分析を行うため、因子抽出を実施した。因子の抽出は Minimum Residual とし、因子間での相関が予想されるため、因子の回転は Promax (斜行) とした。因子数はスクリープロットから 3 因子と決定した (図 1)。また、因子間の相関係数は表 2 のように示される。

表 1 アンケート項目一覧

質問番号	質問
Q01	興味がない授業でも、やる気を持って受ける。
Q02	授業内容に興味がなくなっても、自分を奮い立たせて話を聞く。
Q03	授業中に退屈したとき、頑張って集中する。
Q04	授業内容に興味がなくとも、内容を理解するように努力する。
Q05	授業課題に興味がなくなったとき、集中するよう努力する。
Q06	授業中に、これまでの理解内容を確認する。
Q07	授業で理解すべき内容を確認する。
Q08	授業で理解すべき内容を考える。
Q09	授業課題によって取り組み方を考える。
Q10	授業中に内容を十分に理解できなかった時、後で理解しなおす。
Q11	授業を受ける前に、以前の内容を覚えているかどうか確かめる。
Q12	授業で新しい内容を学ぶ前に、事前にその内容について大まかな理解をしておく。
Q13	授業を受ける前に、これから学ぶ内容を考える。
Q14	授業内容に合わせて、学習方法を考えなおす。
Q15	学習する時、学習時間を決めて取り組む。
Q16	試験の前には計画を立てて学習する。
Q17	計画を立てて学習をする。
Q18	一週間の学習の予定を立てて行動する。
Q19	自分のできる範囲を計画して学習する。
Q20	自分が考えていたより物事が悪くなりそうでも、心配しすぎないようにする。
Q21	物事がうまくいかなかった時、心配しなくていいと自分自身に言う。
Q22	自体の悪化を考えすぎないようにする。
Q23	物事がうまくいくかどうか不安に感じた時、大丈夫だと自分自身に言う。
Q24	自分では学習意欲は、高い方だと思う。
Q25	自分では積極的に学習していると思う。
Q26	勉強は好きである。
Q27	授業とは関係のない勉強を自主的にする。

Q28	授業に関する勉強（予習や復習、宿題・課題など）をする。
Q29	大学で授業や実験に参加する。
Q30	同性の友達と遊びに行く。
Q31	異性の友達と遊びに行く。
Q32	クラブ・サークル活動をする。
Q33	食事会や懇親会などに参加する。
Q34	家庭教師や塾の講師のアルバイトをする。
Q35	家庭教師や塾の講師以外のアルバイトをする。
Q36	テレビを見ている。
Q37	インターネットサーフィンをする。
Q38	ゲーム（ゲーム機・コンピュータゲーム・オンラインゲーム）をする。
Q39	勉強のための本（新書や専門書など）を読む。
Q40	娯楽のための本（小説や一般書など、漫画や雑誌を除く）を読む。
Q41	マンガや雑誌を読む。
Q42	新聞を読む。
Q43	通学にかかる時間。

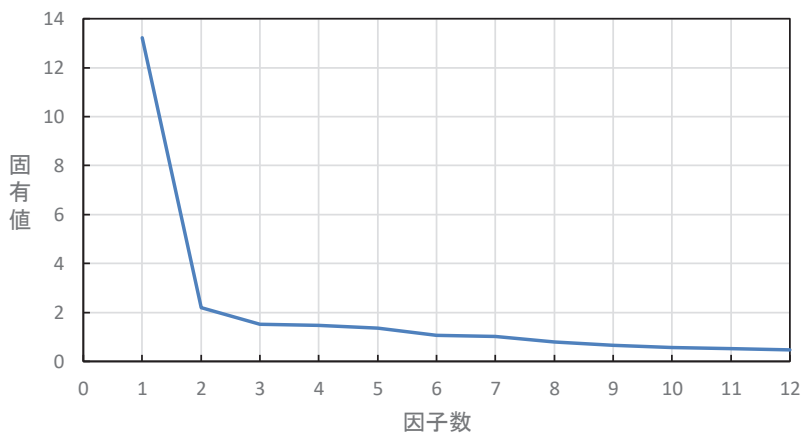


図 1 スクリープロット

表 2 因子間の相関係数

	Factor 1	Factor 2	Factor 3
Factor 1	1.000	0.633	0.704
Factor 2	0.633	1.000	0.407
Factor 3	0.704	0.407	1.000

## 結果

因子分析の結果得られた因子負荷量が表 3 のように得られた。分類された因子（Factor

1～Factor 3)のうち、第一因子 (Factor 1)は「Q13 授業を受ける前に、これから学ぶ内容を考える。」や「Q11 授業を受ける前に、以前の内容を覚えているかどうか確かめる。」など、授業に臨む姿勢や授業に対する態度、第二因子 (Factor 2)は「Q23 物事がうまくいくかどうか不安に感じた時、大丈夫だと自分自身に言う。」や「Q21 物事がうまくいかなかった時、心配しなくていいと自分自身に言う。」など不測の事態や結果に対する自己調整力、第三因子 (Factor 3)は「Q24 自分では学習意欲は、高い方だと思う。」や「Q25 自分では積極的に学習していると思う。」など自己評価に関する項目である。濃色の質問項目ほど因子に対する関与が大きいことを表している。5列目の Communality は寄与率、6列目の Uniqueness は独自性を表している。解析にはデータ分析ソフト (Exploratory, Exploratory Inc.)を使用した。

4月のアンケート結果に基づく因子スコアのデータを使用した K-means 法による各因子のクラスタリングを行い、Calinski-Harabasz の指標値が最大となる2つのクラスター (群)に分けられた (図2～図4)。2つの群はFactor 1～Factor 3がいずれも高い群とそうでない群である。クラスター1とクラスター2は学習意欲の高低によって分類されており、図中のエラーバーは標準偏差を表している。クラスタリングにはビジュアル分析プラットフォームである Tableau Desktop を使用した。授業に臨む姿勢や授業に対する態度 (第一因子)から自己評価 (第三因子)のすべてが高い群は学習意欲が高く、また、課題や困難に対する自己調整力も高い学生と考えられる。他方の群はそれらが低い学生と考えられる。

表 3 因子負荷量

質問番号	Factor 1	Factor 2	Factor 3	Communality	Uniqueness
Q13	0.997	-0.028	-0.241	0.716	0.284
Q11	0.883	0.009	-0.155	0.641	0.359
Q12	0.881	0.022	-0.177	0.635	0.365
Q06	0.843	-0.007	-0.071	0.631	0.369
Q10	0.808	0.033	-0.010	0.681	0.319
Q05	0.722	-0.132	0.218	0.628	0.372
Q18	0.674	0.120	-0.132	0.475	0.525
Q07	0.651	0.092	0.078	0.593	0.407
Q02	0.643	-0.114	0.366	0.721	0.279
Q04	0.627	-0.154	0.315	0.590	0.410
Q14	0.623	0.208	-0.012	0.603	0.397
Q08	0.604	0.078	0.128	0.560	0.440
Q03	0.557	-0.052	0.407	0.707	0.293
Q01	0.506	0.004	0.356	0.615	0.385
Q15	0.462	0.263	0.078	0.522	0.478
Q09	0.370	0.250	0.157	0.460	0.540
Q27	0.356	-0.146	0.030	0.086	0.914
Q23	-0.247	0.967	0.145	0.749	0.251
Q21	-0.118	0.889	-0.017	0.648	0.352
Q22	0.155	0.638	0.005	0.573	0.427
Q20	0.124	0.571	0.032	0.463	0.537

Q17	0.386	0.454	-0.050	0.562	0.438
Q16	0.213	0.451	0.029	0.404	0.596
Q19	0.309	0.436	0.014	0.486	0.514
Q24	-0.282	0.112	0.953	0.703	0.297
Q25	-0.148	0.096	0.862	0.660	0.340
Q26	-0.056	0.142	0.559	0.350	0.650
Q29	0.017	-0.148	0.356	0.110	0.890
Q28	0.122	-0.111	0.339	0.145	0.855

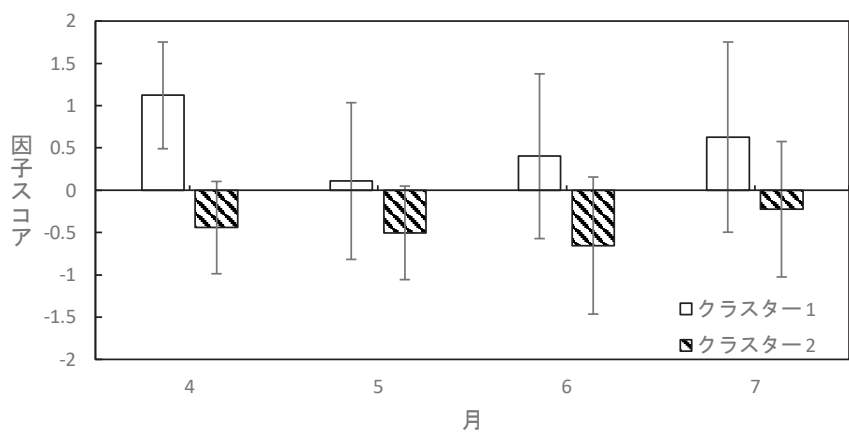


図 2 第一因子のクラスタリング

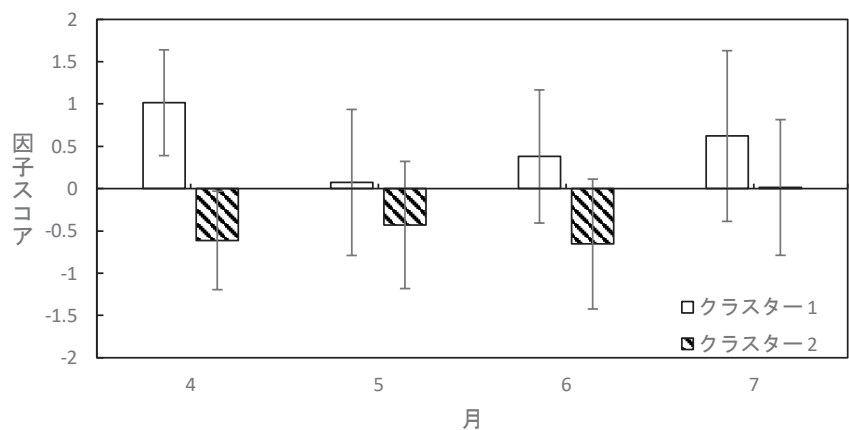


図 3 第二因子のクラスタリング

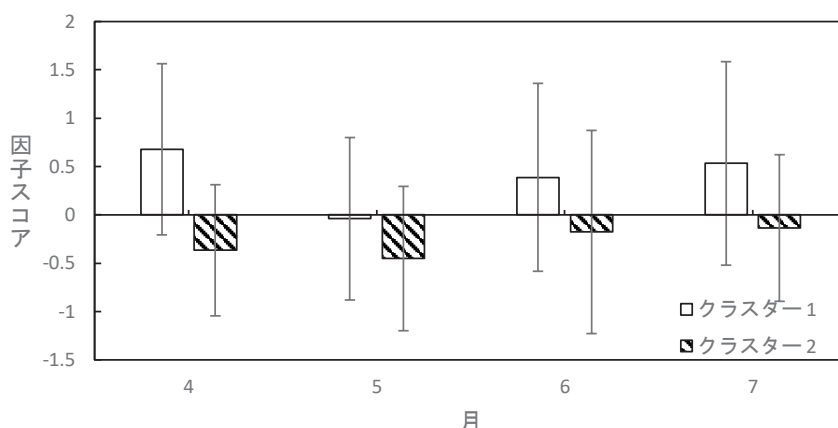


図 4 第三因子のクラスタリング

## 考察

クラスタリングと時間経過による変化を観察すると、各因子が高い群の学生が4月から5月にかけて学習意欲の低下が見られ、その後、7月にかけて学習意欲の回復が見られる。その一方で、いずれの因子においても4月の水準に戻ることはなく、4月時点が最も高くなっている。したがって、授業に臨む姿勢や態度が前向きと考えられる学生や自己調整力、自己評価が高い学生であったとしても4月から5月にかけて学習意欲が低下する。そして、それを自覚した後に学習意欲を取り戻すがその歩みは遅く、前期中には取り戻し切れていないことがうかがえる。各因子が低い群の学生に関しては第一因子および第三因子において同様の傾向が見られる。第一因子に関しては因子の高い群の学生に比べて回復傾向に入る時期が遅く、4月から6月にかけて低下し、その後上昇に転じている。また、7月の水準は4月のそれよりも高く、前期開始時(4月)に比べ前期末時点(7月)では授業に臨む姿勢や態度が良化していることがうかがえる。第二因子に関しては4月から5月にかけてやや改善するが6月に低下し、7月に再度上昇している。第二因子、第三因子は第一因子同様、7月時点では4月時点の水準よりも高くなっている。

第二因子の各因子が低い学生を除き、両群の学生が4月から5月にかけて学習意欲が低下しているのは授業形態と関連があると考えられる。北陸大学経済経営学部では1年次に基礎ゼミナールという少人数クラスが開講され、必修科目として配置されている。そこでは専門基礎ゼミナール同様、さまざまなテーマに対してグループワークを中心に演習が行われ、学生の主体性や協働性といったコンピテンシーを身に付けられるよう設計されている。他方、本稿の対象である専門基礎ゼミナールは少人数かつグループワークという点では共通しているが、幅広く専門分野の基礎知識を身に付けられるよう、コンピテンシーに加え、リテラシーを身に付けられるよう設計されている。学生によっては同じグループワークであってもリテラシー系の授業が苦手な学生もいるため意欲が低下してしまう可能性がある。また、グループワークそのものが苦手な学生にとっては1年次と同様の授業が繰り返されるといった印象を持ってしまうことで学習意欲の減退が生じるのではないかと考えられる。こうした点については1年次の基礎ゼミナールと2年次の専門基礎ゼミナールの連携や、専門基礎ゼミナールの授業設計を改善することで学生の学習意欲減退を止めるこ

とができるかもしれない。

他方で、5 月以降の学習意欲の上昇に関しては単位修得が関係していると考えられる。専門基礎ゼミナールはおおむね 4 回の授業を 1 つのユニットとして構成されており（したがっておよそ 1 か月につき 1 つのユニットで構成される）、各ユニットにおいて最終レポートの提出を求めている。最終レポートは授業内容と関係し、かつ、成績に影響を与えるため単位修得のために提出が必須である。4 月から 5 月にかけて学習意欲が減退した学生であったとしても今の学習態度、意欲では単位修得が危ぶまれることに気づき、授業に対する前向きな姿勢を取り戻すのではないかと推測される。ただし、その時期については時間的差異が存在しており、もともと授業に対して前向きな学生は 5 月から 6 月にかけてそれを取り戻すのに対して、そうでない学生は 6 月から 7 月にかけて取り戻すようである。こうした点に関しては、提出されたレポートのフィードバックなどを適切なタイミングで行うことで学生各自に現在置かれている立場・状況を認識させるといった働きかけをする必要があるかもしれない。

## おわりに

高校生から大学生へと立場や通学先などが変化し、学習内容が異なる大学 1 年生と比較して大学 2 年生は大学自体に、また、学習内容に慣れてくるため学習に対する意欲や態度に変化が生じると考えられる。本稿は北陸大学経済経営学部の 2 年生を対象として、学習態度に関する時間的変化の可視化を試みた。本稿の分析の枠組みの中において、学生は 5 月にかけて学習意欲が低下し、その後改善するという傾向を見せた。しかし、改善する時期はもともと学習意欲が高い学生とそうでない学生で時間的に差が生じ、意欲の高い学生ほど改善までの時間が短いことが示された。こうした差異は田部田・篠原・斎藤（2023）が同様に北陸大学経済経営学部の学生を対象に行ったアンケート調査のように、卒業後のキャリアなど「何のために今学習しているのか」という点について学生間で意識が異なるからであろう。大学 2 年生は授業にも慣れ、就職活動が本格化する前の大学生活において最も自由な時間である。その時期に学習意欲が減退してしまうことが一定程度致し方のないことかもしれないが、この時期に適切な働きかけをすることで、学生のさらなる成長を促すことが可能になると考えられる。同様に篠原・斎藤・田部田（2023）が行っているように、1 年生の時にどのような態度や意欲で授業に臨んできていたかを把握し、入学時からの態度変化という観点からの分析も必要であろう。

本稿は 4 月から 7 月という限られた期間での学生の変化を対象とした。今後、夏休みなどの長期休暇や授業が変化する後期など、学生を取り巻く環境が変化したときに学習意欲にどのような変化が生じるのかについてはさらなるアンケートを積み重ねることで明示したい。

## 参考文献一覧

- 梶谷康介，土本利架子，佐藤武（2021）「新型コロナウイルス感染症（COVID-19）パンデミックが大学生のメンタルヘルスに及ぼす影響：文献および臨床経験からの考察」『健康科学』43，1-13.
- 篠原史成，斎藤英明，田部田晋（2023）「専門基礎ゼミナールにおける主体的な学びの変化」『北陸大学紀要』55，147-154.
- 田部田晋，篠原史成，斎藤英明（2023）「2023 年度前期専門科目群におけるキャリア意識の特徴」『北陸大学紀要』55，165-172.

- 中井俊樹（2015）『シリーズ大学法 3 アクティブラーニング』玉川大学出版部.
- 畑野快・及川恵・半澤礼之（2011）「大学生を対象とした自己調整学習方略尺度作成の試み」  
『日本教育心理学会』第 53 回総会発表論文集.
- 北陸大学（2021）「北陸大学 Vision50(by2025)長期ビジョン・第 2 期中期計画 計画書」  
Available at: [https://www.hokuriku-u.ac.jp/doc/vision/HU\\_Vision50.pdf](https://www.hokuriku-u.ac.jp/doc/vision/HU_Vision50.pdf)(Accessed:  
30th March 2021).
- 溝上真一（2009）「「大学生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討-正課・正課外  
のバランスのとれた活動が高い成長を示す」『京都大学高等教育研究』15, 107-118.
- 文部科学省中央教育審議会（2012）「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向け  
て～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～(答申)」Available at:  
[https://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf) (Accessed: 23rd September 2019).
- 山内祐平（2021）「コロナ禍下における大学教育のオンライン化と質保証」『名古屋高等教育研究』21, 5-25.